

外国語

1 全般的事項

問1 中学校学習指導要領の改訂の内容はどのようなになっているか。

中学校学習指導要領における外国語科の改訂の要点は、①4技能を総合的に育成する指導を充実する、②4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、文法指導を言語活動と一体的に行う、③コミュニケーションを内容的に充実したものとすることができるよう、指導すべき語数を充実する、④「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の四つの領域をバランスよく指導し、高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培う、などである。また、中学校の外国語科の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」ことであり、小学校における外国語活動で育まれた素地の上に、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の四つの技能をバランスよく育成することの必要性が強調されている。このような方針のもとに、中学校においては、身近な事柄について一層幅広いコミュニケーションを図ることができるようにするため、授業時数の増加（各学年とも年間105時間から140時間に増加）を実施するとともに、指導する語数を従来の「900語程度まで」から「1200語程度」へと増加させている。

したがって、このような中学校の改訂の内容を踏まえ、4技能を総合的に育成するための統合的な指導を行い、生徒のコミュニケーション能力を更に伸ばすことが大切である。

問2 各科目の履修に当たって配慮すべき事項は何か。

履修に当たっては次のことに配慮することとする。

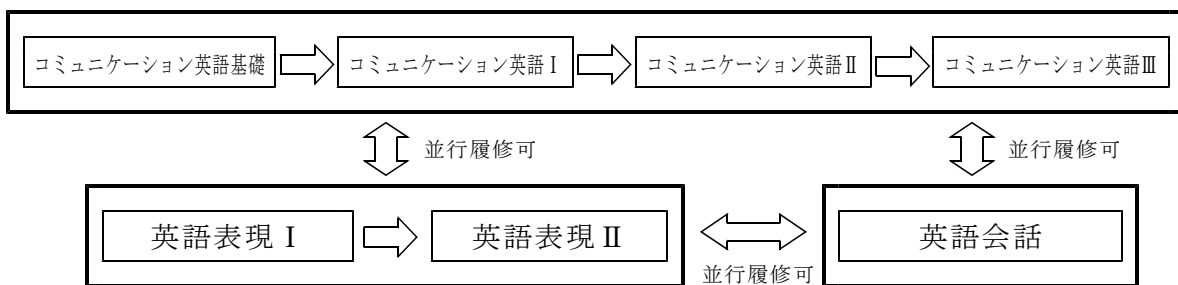
- (1) 「コミュニケーション英語Ⅰ」を必修科目として設定する。
- (2) 「コミュニケーション英語Ⅰ」以外の科目については、地域や学校の実態、課程や学科の特色、生徒の心身の発達の段階及び特性等を十分に考慮して、選択履修させる科目を設定する。
- (3) 各科目の単位数については、一般的には、その科目の標準単位数で履修させることになるが、地域や学校の実態、課程や学科の特色、生徒の心身の発達の段階及び特性等を考慮して、特に必要がある場合は、標準単位数を基準に上下に一定の幅の範囲内で具体的な単位数を配当することができる。ただし、必修科目である「コミュニケーション英語Ⅰ」については、標準単位数を減じる場合、2単位を下回って設定することはできない。また、各科目の標準単位数を減じる場合、生徒の実態から見て、標準単位数を減じても目標の実現や内容の習得が可能であることが前提となることから、

生徒の実態を踏まえずに標準単位数を減じるようなことは、厳に慎まなければならない。
 (4) 「コミュニケーション英語基礎」を履修させる場合、「コミュニケーション英語Ⅰ」は「コミュニケーション英語基礎」を履修した後に履修させることを原則とする。

「コミュニケーション英語Ⅱ」は「コミュニケーション英語Ⅰ」を履修した後に、「コミュニケーション英語Ⅲ」は「コミュニケーション英語Ⅱ」を履修した後に、「英語表現Ⅱ」は「英語表現Ⅰ」を履修した後に、履修させることを原則とする。

なお、「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」は、「英語表現Ⅰ」及び「英語表現Ⅱ」並びに「英語会話」と並行履修させることが可能である。また、「英語表現Ⅰ」及び「英語表現Ⅱ」は、「英語会話」と並行履修させることが可能である。

【履修順序と並行履修について】



【教育課程の編成例】

○「コミュニケーション英語基礎」を履修しない場合

教科	科 目	標準単位数	1年	2年	3年
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3		
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		4	
	コミュニケーション英語Ⅲ	4			4
	英語表現Ⅰ	2	2		
	英語表現Ⅱ	4		2	2
	合 計		5	6	6

○「コミュニケーション英語基礎」を履修する場合

教科	科 目	標準単位数	1年	2年	3年
外国語	コミュニケーション英語基礎	2	2※		
	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3※		
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		2	2
	英語表現Ⅰ	2		2	
	英語会話	2			2
	合 計		5	4	4

※前期で「コミュニケーション英語基礎」の履修を完了した後、後期から「コミュニケーション英語Ⅰ」を履修する。

問3 各科目において、言語活動を行う際の配慮すべき事項は何か。

各科目の「内容」には、「コミュニケーション英語基礎」を除き、「生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定

して、次のような言語活動を英語で行う。」ことが共通して示されている。これは、コミュニケーション活動を行う際の基本的な考え方を明確に表したものである。

コミュニケーションにおいて、言語は常に具体的な場面で、具体的な働きを果たすために使用され、言葉の意味は、その場の状況や前後の文脈によって決まる場合が多い。したがって、授業においてコミュニケーション能力の育成を図るためには、言語の使用場面と働きを明らかにし、具体的な文脈を想定した上で指導に当たることが重要である。

このため、授業において言語活動を行う際の参考として、次のように言語の使用場面を三つに整理して代表例を示し、また、言語の働きの例を五つ設定して具体例を示している。

(1) [言語の使用場面の例]

- a 特有の表現がよく使われる場面
- b 生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面
- c 多様な手段を通じて情報などを得る場面

(2) [言語の働きの例]

- a コミュニケーションを円滑にする
- b 気持ちを伝える
- c 情報を伝える
- d 考えや意図を伝える
- e 相手の行動を促す

なお、実際のコミュニケーションにおいては、情報や考えなどの送り手と受け手とがやりとりする場合が多く、受け手が送り手に対して情報や考えなどを求めることも、情報を伝える機能の一部を担っている点に留意する必要がある。

これらの言語の使用場面と働きの例の中から、各科目の目標を達成するのにふさわしいものをそれぞれ選択して言語活動を行うことになる。

2 コミュニケーション英語基礎

問1 「コミュニケーション英語基礎」の指導上の留意点は何か。

「コミュニケーション英語基礎」の目標は、「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの基礎的な能力を養う。」ことであり、次の二つの要素から成り立っている。

- (1) 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- (2) 英語を通じて、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの基礎的な能力を養うこと。

(2)は、生徒が「コミュニケーション英語Ⅰ」での学習に円滑に移行できるように、中学校における学習内容を十分に定着させ、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」という4技能の基礎を固めることを意味する。この科目は、高等学校外国語科において英語を履修するときに、中学校で学習した「英語」の定着を図ることにより、必修科目である「コミュニケーション英語Ⅰ」での学習に円滑に移行できる力を養うために設定された。

「コミュニケーション英語基礎」の指導に当たっては、生徒の中学校における学習内容の定着の程度と英語の学習に対する姿勢や学習習慣に配慮しつつ、「コミュニケーシ

「コミュニケーション英語Ⅰ」を無理なく履修することができるコミュニケーション能力の基礎を養うことを目指すことが重要である。そのため、中学校における基礎的な学習内容を整理しながら、この科目が高等学校外国語科の科目であることを踏まえた活動を工夫することが肝要である。

実際の指導に当たっては、英語を学び、使うことに興味を抱かせるために、英語を使った活動を豊富に体験させたり、主体的な学習習慣が育つよう配慮したりすることが重要である。

3 コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ、コミュニケーション英語Ⅲ

問1 「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」の指導上の留意点は何か。

「コミュニケーション英語Ⅰ」の目標は、「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う。」ことであり、次の二つの要素から成り立っている。

(1) 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。

(2) 英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養うこと。

(2)は、聞いたり読んだりして得た情報や考えなどを的確に理解したり、自分が伝えたい情報や考えなどを受け手に対して適切に伝えたりする基礎的な能力を養うことを意味する。

なお、「コミュニケーション英語Ⅱ」は「コミュニケーション英語Ⅰ」で養った基礎的な能力を伸ばすことを目標に、また、「コミュニケーション英語Ⅲ」は「コミュニケーション英語Ⅱ」で伸ばした能力を更に伸ばし、社会生活において活用できる力を身に付けさせることを目標に設定された。

「コミュニケーション英語Ⅰ」の指導に当たっては、中学校における「英語」や高等学校における「コミュニケーション英語基礎」の指導を踏まえて行われるため、中学校における学習内容の定着を図る必要がある場合は、「コミュニケーション英語基礎」を履修させてから、この科目を履修させることが重要である。

「コミュニケーション英語Ⅰ」の学習内容を定着させるには、生徒に多くの言語活動を経験させることが大切である。様々な言語活動を経験することにより、繰り返し同じ語句や文構造、文法事項などに接することになり、生徒自身が徐々に言語を内在化させていき、学習内容の定着を図ることができる。そのため、中学校における「英語」や高等学校における「コミュニケーション英語基礎」の学習内容に繰り返し触れることができる様々な言語の使用場面を設け、活動を通じて一層の定着を図っていくことが大切である。

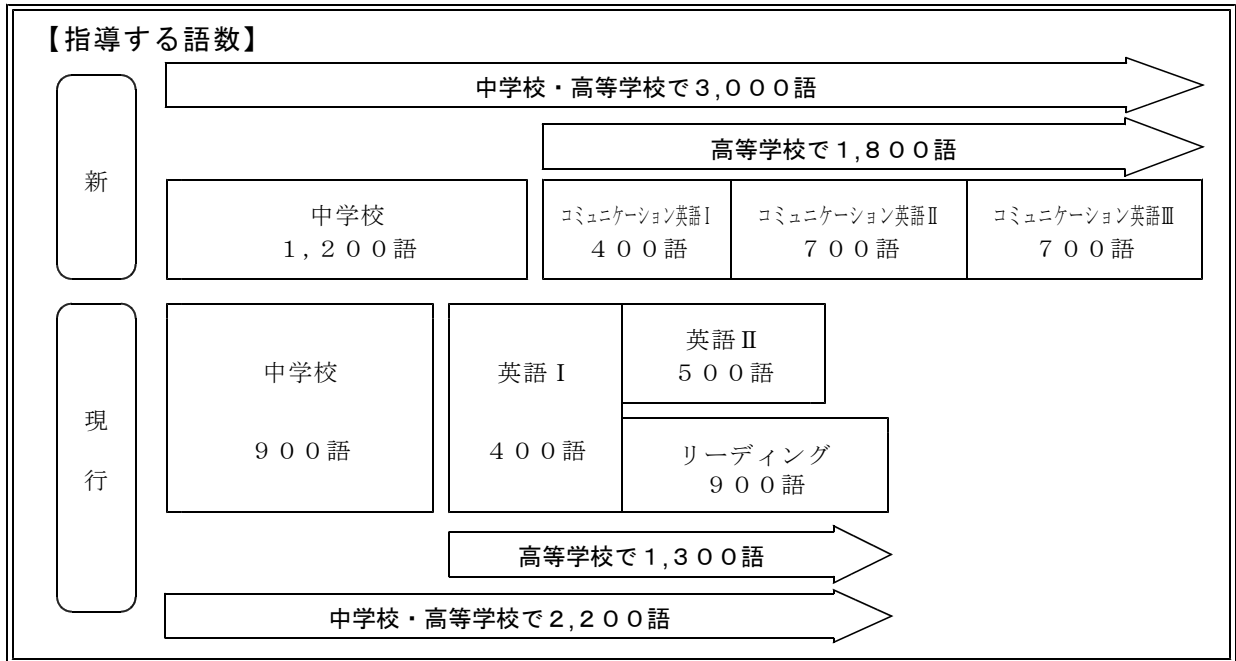
なお、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」の「内容の取扱い」については、「コミュニケーション英語Ⅰ」の「内容の取扱い」と同じことに

配慮して、それぞれの科目の目標に基づいて取り扱うことに留意すること。

※指導する語数及び文法事項の扱い

今回の改訂では、指導する語数を充実し、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」をすべて履修した場合、高等学校で1,800語、中学校・高等学校で3,000語を指導することとされた。

また、文法事項については言語活動と効果的に関連付けて指導するとともに、すべての事項を「コミュニケーション英語Ⅰ」で扱うことに留意すること。



4 英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ

問1 「英語表現Ⅰ」及び「英語表現Ⅱ」の指導上の留意点は何か。

「英語表現Ⅰ」の目標は、「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う。」ことであり、次の二つの要素から成り立っている。

- (1) 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- (2) 英語を通じて、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養うこと。

(2)は、「事実や意見などを多様な観点から考察」とともに、「論理の展開や表現の方法を工夫しながら」話したり書いたりする能力を養うことを意味する。

なお、「英語表現Ⅱ」は「英語表現Ⅰ」で養った能力を伸ばすことを目標に設定された。

「英語表現Ⅰ」においては、話したり書いたりする言語活動を中心に行う。話したり書いたりする言語活動は、生徒が学習した情報や考え、自分の考えや気持ちを伝える大切な言語活動であり、自己表現できる機会である。

「英語表現Ⅰ」の指導に当たっては、生徒がそのような機会を多くもつように授業を展開することが、生徒が話したり書いたりする能力を向上させるということを常に意識することが大切である。

この科目は、話したり書いたりする言語活動を中心に行う科目であるが、聞くことや読むことも必然的に学習することになる。例えば、聞くことや読むことを通して、これから話すことや書くことの内容を入手する場合もある。また、話すことと書くことが一連になった活動もあると考えられる。例えば、最初にメモをとってから発表したり、ある話題について話し合いをしてから、それについて文章を書いたりすることが挙げられる。したがって、話すことや書くことを重視した言語活動を行いながらも、他の技能とも有機的に結び付けた指導を行うことが重要である。

なお、「英語表現Ⅱ」の「内容の取扱い」については、「英語表現Ⅰ」の「内容の取扱い」と同じことに配慮して、科目の目標に基づいて取り扱うことに留意すること。

5 英語会話

問1 「英語会話」の指導上の留意点は何か。

「英語会話」の目標は、「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、身近な話題について会話する能力を養う。」ことであり、次の二つの要素から成り立っている。

- (1) 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- (2) 英語を通じて、身近な話題について会話する能力を養うこと。

(2)は、「外国語科の目標」の後半にある「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」ことを受けて、特に身近な話題について英語で会話する能力を養うことを意味する。

この科目の指導に当たっては、中学校で扱う基礎的な学習事項の更なる定着を図りながら、特に音声によるコミュニケーション能力の向上を図ることが重要である。

中学校における指導では、使用する言語材料について理解したり練習したりする活動と、実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動とのバランスに配慮することが重要であるとされている。高等学校では、この基本的な考え方を踏まえながら、より実践的な言語活動を多く取り入れ、その中で言語材料の理解や定着を図る工夫をする必要がある。十分な言語活動を体験させることを通して「聞いたり話したりする能力の向上」を図り、これまで学んだことが実際に活用できるという達成感と自信を生徒にもたせることが大切である。

また、この科目においては、身近な話題について会話する能力を養うことをねらいとしているが、音声を中心としたコミュニケーションにおいても、読むこと及び書くことという文字によるコミュニケーションは重要である。文字によるコミュニケーションと関連付けることによって、音声によるコミュニケーションがより現実味を帯びたり、より豊かなものになったりするものであり、この点に配慮した指導を行うことが大切である。